

国際関係学科専任教員が推薦・紹介する下記リストから、<図書> 1点および<映画・ドキュメンタリー> 1点を選び(どの教員が推薦するものから選んでもよい)、それぞれについて、それらの内容(著者・作者は何を主張しているのか、何を主張の根拠としているのか)と自分の見解や関心(ただ単なる感想ではなく、自分は図書・映画の内容や著者・作者の主張のどの点に興味・関心を持ったのか、その内容・主張について自分はどのように考えるのか)をレポートにまとめて、秋学期の最初の国際関係概説の授業時に提出すること。レポートは、原則としてワープロA4版横書きで作成し、プリントアウトして提出すること。字数は、<図書>および<映画・ドキュメンタリー>のそれぞれについて800~1000字程度。また、本人の氏名・学生証番号・国際関係学概説所属クラス名(KG1~5)および選択した<図書>および<映画・ドキュメンタリー>の表題を明記すること。

<1> 図 書

河原地 秀武

堤 未果『ルポ 貧困大国アメリカ』(岩波新書)
今日のアメリカの深刻な一面がよくわかる。

ジョージ・オーウェル(高畠文夫訳)『動物農場』(角川文庫)
スターリン主義批判の書。社会主義の問題点がよくわかる。

小林多喜二『蟹工船・党生活者』(新潮文庫)
近年、再評価されている小説。この小説が今日よく読まれている理由を考えてほしい。

東郷和彦『歴史と外交 靖国・アジア・東京裁判』(講談社現代新書)
日本の歴史と未来を考える上で欠かせない思索の書。

鳥飼玖美子『歴史をかえた誤訳』(新潮文庫)
外交交渉に興味のある人にはぜひ読んでほしい本。

北澤 義之

塩川伸明『民族とネーション』(岩波新書)
国際関係でも重要な民族問題の歴史(18世紀~現代)を、コンパクトに解説する基本文献です。

広河隆一『パレスチナ〔新版〕』(岩波新書)
フォトジャーナリストである著者が「現場の目線」でパレスチナの現状をレポートします。

桜井啓子『現代イラン 神の国の変貌』(岩波新書)
外からは分かりにくい「イスラム革命国家」イランの意外な内情を分かりやすく解説しています。

中村政則『戦後史』(岩波新書)
第二次世界大戦後の日本の発展や矛盾を知る上で基本的な情報を提供してくれます。

正躰 朝香

宮島 喬『ヨーロッパ市民の誕生 - 開かれたシティズンシップへ』(岩波新書)
ヨーロッパ統合が進むなかで、市民レベルでの社会との関わりの変化について具体例を多くあげながら考察している。

中西 寛『国際政治とは何か - 地球社会における人間と秩序』(中公新書)
「安全保障」「政治経済」「価値意識」の三つの角度から、「国際政治とは何か」、そしてそこでの人間の営みを明らかにしようと試みている。

東野 真『緒方貞子 - 難民支援の現場から - 』(集英社新書)
冷戦後の国際関係の変化のなかで、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)のトップとして難民支援をいかに指揮したかについて書かれている。

伊勢崎賢治『武装解除 紛争屋が見た世界』(講談社現代新書、2004年)
東ティモール、シエラレオネ、アフガニスタンなどの現場で復興期のDDR(武装解除、動員解除、社会再統合)に携わった経験とそれに基づく知見が語られている。

高木 徹『戦争広告代理店 情報操作とボスニア紛争』(講談社文庫、2005年)
ボスニア紛争において、ボスニア=被害者、セルビア=加害者という一方的な図式が、作り上げられて行く過程が詳細な取材に基づいて描かれている。

鈴木 清巳

中沢孝夫『就活のまえに』(ちくまプリマー新書、2010年)
働くことの大切さ、仕事が自分を成長させてくれることを抑えた口調で語る良書。

神門善久『さよならニッポン農業』(生活人新書、NHK出版、2010年)
お手軽な農業ブームの中で、日本農業の根本的な問題点を鋭くえぐり出す批判の書。

鶴見俊輔『思い出袋』(岩波新書、2010年)
岩倉に住む、日本を代表するリベラル思想家の含蓄あるエッセイ。未読すべし。

堀江則雄『ユーラシア胎動 - ロシア・中国・中央アジア - 』(岩波新書、2010年)
欧米中心でも、東アジア中心でもなく、「ユーラシア」に視点を据えた世界の見方。

岩間 敏『世界がわかる石油戦略』(ちくま新書、2010年)
石油価格変動の仕組み、産油国の戦略を分析し、日本の取るべき石油戦略を論じる。

高原 秀介

加藤陽子『戦争の日本近現代史』(講談社現代新書)
近代日本外交をめぐる諸問題について、単なる歴史的事実にとどまらず論点を意識して書かれた好著。

五百旗頭真『日米関係史』(有斐閣)
ペリー来航から現代に至る150年に及ぶ日米関係史を描いた通史。

入江 昭『歴史を学ぶということ』(講談社現代新書)
世界を代表する外交史家である著者が、自身の回想と歴史の学び方について述べたもの。

高坂正堯『国際政治』(中公新書)
国際政治の内実と問題点に焦点をあてた、国際関係の基本的認識を学べる好著。

有賀 貞『国際関係史』(東京大学出版会)
16世紀から1945年に至る国際関係の歴史について、世界史的視点で書かれた好著。

田中 義浩

塩川伸明『民族とネイション』（岩波新書）

ボーダレス化の中で、なぜナショナリズムが興隆するのかを問うたもの

ナヤン・チャンダ（友田・滝上訳）『グローバリゼーション - 人類5万年のドラマ(上下)』（NTT出版）

アフリカでの人類誕生から現代のグローバリゼーションに至る壮大な人類の歴史を描いたもの

浜 矩子『グローバル経済』（岩波新書）

2008年のリーマン・ショックに象徴される、いわゆる「金融暴走」の原因と帰結

セルジュ・ミッシェル、ミッシェル・ブーレ（中平訳）『アフリカを食い荒らす中国』（河出書房新社）

中国によるアフリカ進出の光と影を描いたドキュメント

日本経済新聞社編『裏読み世界地図』（日経ビジネス人文庫）

海外駐在記者による最新国際ニュースの分析・解説

マコーマック ノア

伊豫谷登士翁『グローバリゼーションとは何か』（平凡社新書）

現代世界における移動と越境を考える。

本橋哲也『ポストコロニアリズム』（岩波新書）

差別と不平等の系譜を描く。

リチャード・セネット『不安な経済・漂流する個人』（大月書店）

資本主義の市場原理が生活世界の隅々まで浸透している今日、どう生きるべきか？

姜 尚中『暮らしかから考える政治』（岩波ブックレット）

政治と日常生活の直接的なつながりを探る。

佐藤郁哉『暴走族のエスノグラフィー：モードの叛乱と文化の呪縛』（新曜社）

京都南部の暴走族の生活と文化を描いた著名な民族誌。楽しく読める！たぶん？

ジョック・ヤング『後期近代の目眩 - 排除から過剰包摂へ』（青土社）

現代世界の諸相（監視社会、不安と恐怖の横行、フレキシブル化する世界経済）・相互作用を分析。

松川 克彦

山崎今朝弥『地震・憲兵・火事・巡査』（岩波書店）

永井荷風『断腸亭日乗』（岩波書店）

高橋是清『高橋是清自伝』（中央公論）

人は大抵の場合素直でなければならないが、いつかあるとき徹底的に反抗しなければならないことがおこる。明治、大正、昭和という時代に、ここに挙げた反抗精神旺盛な3人の日本人がいたことを知っていただきたい。彼らは何に抵抗したのだろうか、夏休み、じっくりと、我々の先輩たちの生きてきた時代、その生き方を見ていただきたい。『断腸亭日乗』の「日乗」とは日記のこと。いずれの書物も本学図書館所蔵。

丸山 珠里

明石 康『国際連合 軌跡と展望』（岩波新書）

小松正之・遠藤 久『国際マグロ裁判』（岩波新書）

多谷千香子『民族浄化を裁く』（岩波新書）

庄司克宏『欧州連合 統治の論理とゆくえ』（岩波新書）

最上敏樹『いま平和とは 人権と人道をめぐる9講』（岩波新書）

横山 史生

NHK取材班『マネー資本主義 - 暴走から崩壊への真相』（NHK出版、2009年）

サブプライム住宅ローン証券化商品など特殊な金融商品への過剰な投資の誕生、膨張、崩壊の過程を、関係者らの証言により検証。NHK放映ドキュメンタリー・シリーズ「マネー資本主義」をもとに書籍化。

坪井ひろみ『グラミン銀行を知っていますか』（東洋経済新報社、2006年）

途上国市民の自立支援を目指すマイクロ・クレジット型金融機関の草分けであるグラミン銀行の活動を、その創始者でありノーベル平和賞受賞者であるムハマド・ユヌス博士の思想とともに紹介。

西川 潤『データブック 貧困』（岩波ブックレット、2008年）

先進国と途上国の間の経済格差のみならず、先進国内にも貧困は存在すること、その背景にはグローバリゼーションの進行=市場経済の拡大という、歴史的・構造的な状況があることを指摘。

伊豫谷登士翁（いよたにとしお）『グローバリゼーションとは何か』（平凡社新書、2002年）

現代における先進国・途上国関係および各国の経済・社会・文化・生活の変容を、15世紀末の「新大陸発見（?!）」以来継続する「世界の市場経済化」プロセスの帰結として位置付ける。

三浦俊章編訳『オバマ演説集』（岩波新書、2010年）

彼の演説のうまさだけでなく、米国国内問題（政治・社会・経済）および国際関係（安全保障、対アジア通商関係）に対する彼の戦略・意図を吟味することが重要。

吉田 豊子

ラティモア『中国 民族と土地と歴史』（岩波新書）

「歩く歴史家」によるすぐれた中国入門書。古くても新しく読める。

毛里和子『日中関係 戦後から新時代へ』（岩波新書、2006年）

「脱冷戦」の日中関係の構築のために。

天児 慧『中国・アジア・日本 大国化する「巨龍」は脅威か』（筑摩新書、2006年）

巨大国家中国とどうつき合うか。

加々美光行『中国の民族問題 危機の本質』（岩波現代文庫、2008年）

民族問題を通して中国の政治・外交・国際関係を考える。

堀江則雄『ユーラシア胎動 ロシア・中国・中央アジア』（岩波新書、2010年）

今、「シルクロード」で何が起きているのか。21世紀の世界認識のために。

< 2 > 映画・ドキュメンタリー

マコーマック ノア

映画評論とは、映画の要約ではない！ 映画は娯楽の一種であると同時に、消費者からお金をまきあげるための商品でもある。また、映画は政治的なメッセージを普及させる媒体ともなる。あるいはまた、映画は作成した人や国や時代背景を反映する作品となることもある。皆様に考えていただきたい問題は次のようなものである： なぜ国際関係の学生にこれらの作品をすすめたのか？ これらの作品には政治や経済やグローバル化や暴力や差別や戦争や平和や帝国主義に関してどのようなメッセージが込められているのか？ そのメッセージは誰によって誰に向かって発信されているのか？ 誰の声や語りが聞こえてこないのか？ 誰の視点が優先されているのか？ どのような世界観もしくは宇宙観が表象されているのか？

バベル

グローバル化をどう描いているのか？ 勝ち組・負け組と世界経済のつながり？

ランボーII

人種の表象は？ 外交政策としての暴力の美化？ 米国の視点ではない視点から見てみた場合どういう作品？

ランボーIII

9・11以前のアフガンを舞台にした冷戦モノ。ランボーはソ連軍を襲う「自由軍」すなわち今日米国などで俗に言う「テロリスト」と組んで！！？？何で？ どういうこと？

ランボーIV

タイで暮らしているジョン・ランボーは、ビルマの軍事政権（軍事政権はミャンマーと言いますが）に捕まってしまうキリスト教伝道師を救うために再び大量虐殺を犯す。

ドクター・ストレンジラブ

冷戦時代の核戦争をテーマにした古典！ 狂った軍司令官、さえない政治家、相互破壊に基づく安全保障... というか、テロの保障というべきか...

ナイロビの蜂

貧困国の人々を実験台に使う大手薬品会社の悪行を訴える作品。映画がよくないというわけではないが、小説の方がいい。

アンダーグラウンド

歌と音楽とダンスを通して、1940年代から分裂する1990年代までのユーゴスラビアの物語を描く名作。

ブレードランナー

監視社会、疑似人間の倫理学、過剰人口、遺伝子組み換え実験等をテーマとしたSFクラシック。現代・近未来型社会を考えるには？ ジョック・ヤングの『排除型社会』も参照。

ファーレンハイト9・11

米の対テロ戦争の政治的背景を批判的に扱うマイケル・ムーアのドキュメンタリー作品。ノーム・チョムスキーの本とセットにも？

スワロウテイル

グローバルな移動の時代における別の日本。資本主義と移民と格差社会を考えるには？

アルジェの戦い

フランスからの独立を目指すアルジェリアにおける脱植民地化闘争の暴力を描く。非暴力の位置づけは？興味ある人はフランツ・ファノンの本もどうぞ。

アニマル・ファーム

解放 自由 独裁の過程を描く、一応共産主義批判のはずだが、別の見方もあるでしょう。原作小説はジョージ・オーウェルの名作。

スターウォーズI、II

現代世界の比喩として読むことができるのだろうか？誰が悪の帝国なのか？誰が自由軍なのか？どうやって誰が決めるのだろうか？

松川 克彦

アポカリプト

インカ帝国の崩壊は、教科書で習ったようにスペイン人征服者だけの責任であるのだろうか。本学図書館所蔵。

アフガン零年

タリバン支配の恐怖を描いたアフガニスタン人映画監督の作品。本学図書館所蔵。

ストレフォード パトリック

Fog of War (フォッグ・オブ・ウォー) *

Ghosts of Rwanda

An Inconvenient Truth *

The Road to 9/11

13 Days

Imperial Grand Strategy

* 図書館 1 階 AV コーナー所蔵

3 号館 5 階 LL 資料室所蔵